
夕刻のキャンパス

溝口野口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕刻のキャンパス

【Zコード】

Z0441M

【作者名】

溝口野口

【あらすじ】

夕焼けが差し込むキャンパス。敷地内の一室で、悩みを抱えた青年と歳老いた教授との心の通り合いが行われる。

(前書き)

最近忙しくなっており、なかなか時間を見つけて書くことが出来ていません。

とある大学のキャンパスの中。周りを林で囲まれたその敷地では幾つもの建物がひしめき合っていた。

敷地内の自然と対になつたそれらの中に、幾人もの人が出入りし学びそして教鞭をとる。ある時は友人達と冗談を言い合い話し続ける場、また時には一生忘れられないような強烈な経験も待ち受ける場所へと常に変貌する。

それだけ、ここの中には様々な出来事が発生できるような雰囲気で溢れていた。もつと言えば、それらの出来事は必ず敷地内のことかで確実に存在していた。

目指すものがあるから、遺すものがあるから、人々は自らそこにに入る。学ぶ人も教える人も皆何らかの目的や希望を胸に抱きながら敷地内で学び、教鞭を執ろうとする。そしてそれらを受け入れることで、コンクリートで作られた無骨な形の建造物達は学舎としての意味をしつかりと保つていたのだ。

そんな建物が乱立した中の一つ、第三研究棟の一室に目を向けてみよう。3階の端の方にひつそりと、たたずむ扉。その研究室の名前が書かれた紙がぽつんと貼られているだけの無機質な鉄製の扉を開ける。すると、棚に整然と在るべきといふくと並べられた薬剤や器具が、最初に目に付く。

所々にまとめておいてある書類が、今の今まで触られたような顔で端然とあった。部屋の中の様子からしても明らかに廊下の殺風景な見た目とは雰囲気を異にしている。つまりこの中は 鋼鉄の扉の向こう側は廊下の空間から隔絶され、独自の毎日が営まれている、まさしく異世界であった。

詳しく部屋の中を見れば、ビーカーやラバーペットなどの実験器具が、様々な色の瓶に入れられた試薬が、試験管に入った植物が一緒くたになつてゐる。それらが混合された粘土が一つの空間へと練り上げられる。釉薬も掛けず素焼きのまま焼き上げられて、無骨さとかすかな温もりを持つた一つの焼き物となつたのだ。

それが実用的な物、はたまた芸術的価値の高い嗜好の逸品なのか。それは、誰も分からない。ただ一つ言えるのは、そこから見える夕焼けは言いようも無く美しかつたということだけだ。それだけは、ここを拠点とする人達が最も良く知ることだった。

そんな夕焼けの混ざり合つた鮮烈な赤色がやんわりと窓から差し込む空間の中を覗く。そこには二つの人影が緩やかに伸びていた。実習やら研究やらは先程終わり、他の人は一足早く部屋を後にしていた。

今残つてゐるのはまだ帰りの準備をしている生徒と、退官間近の年齢となつた老教授だけであつた。教授はすっかり白髪が各所に混じつた髪を搔きやりながら、どこと無く生徒の様子を見つめている。青年がカバンにノートや筆記用具を詰め終え、扉に向かつ。だが、何を思ったのだろうか、ドアノブに手を掛けてからしばらくそのままじつとしている。教授は一瞬不思議そうな顔をした後、意味あり

げな光景を解き明かすのがいかにも楽しいといつ皿をしていた。

「〇〇教授」

未だドアの近くに立っていたままの生徒が言ござうことと/orを並べるよう、ボソリと話し掛けた。

「ん? 何かな」

「すみません。ちょっと僕の話を聞いてはくれませんか?」

今度は屈強とも貧弱とも言えない体を教授の方に向けて、はつきりとしているが不安を随所に滲ませた声で言った。

「珍しいね。君が相談事なんて」

そう言つと、生徒はサークル活動であらう真つ黒に焼けた顔で、恥ずかしさを揉み消すように笑いながら言葉を続ける。

「考えてみればそんなに重要なことでもないんですけど、たまに良く分からなくなることがあるんですよ」

「ふふっ。いつも明るい君が落ち込む位だから、それは大事なことなのだろう? 取りあえずどこかに座ろうか」

そう言つて教授は、普段実験をする席を指差す。薬品に囲まれたそこに生徒は座り、教授もまた隣の椅子にゆっくりと腰を降ろした。

「そうだ、「一ヒーはいるかね?」

「あ、はい。いただきます」

教授は立ち上がり、片隅にあるポットとインスタントコーヒーの瓶を取り出し、いつも一人が好むブラックの状態のコーヒーを持ってきて、一方を生徒に差し出した。

一口啜り、何の法則性もなく揺れる面に映された自分の顔を見つめながら、自分の悩みを伝える。

「実は……これからどうやってこうか検討もつかないんです。やりたいことが多過ぎるし、何より院試を受けようか就職しようか分からなくて、じつた混ぜの状態なんですよ……」

老教授は、この話を聞いた瞬間に理解した。彼は真面目に考え過ぎ袋小路に陥っているのだと。元々彼は常に突き進むタイプだった。教授は教え子をえこひいきする人柄ではなかつたが、色眼鏡で見なしてもそれが強みでもあり、かつ懸念すべき事項でもあると認識していた。

今、彼は何よりも重要な分岐点にいるのだ。彼は自分の力で道を信じて進まなければならぬ。そんな思いを秘めて返答する。

「……続けて」

「はい、それで悶々としていると自分だけじゃなくて、周りがみんなどうちつかずの壊れやすい物に見えてくるんですよ……僕が考えすぎなのでしょうか？」

老人は今まで自身が感じてみてきたことを、古びたノートのページを破らぬようめぐるよう、そつと思いつ出し始める。それらを元に会話を続ける。

「いや、なんら不思議なことはない。それこそ、みんながみんな一度くらいは考えることだよ。何より私自身もそう見たことがあったわ」

「教授も……ですか」

「そ、まあ何十年も前の話だがね。聞くだけ野暮かも知れないが、そのことについて真剣に思い悩んだことはあるかな？」

「はい、一応」

「なら、話は早い」

そういうと、話を一旦止めて生徒から棚に目を移す。何かないだろつか、そう思いながら棚の端にぽつりと置き去りにされていた一つのモノに手を伸ばした。

教授は桜の枝が挿してある、水の入ったガラスコップを二人が居る間の机の上にそっと置く。

誰かが持つて来たかも知れないその枝には、春の中頃までは満開の花が輪郭を薄い桃色にぼかしていた。今は花びらはとっくに散り果て、茶色の細い枝にはかつての華やかさは微塵も感じることができない。ただ、寂しそうにコップに立て掛けたのである。

「この桜なんかは、はない物の代表的な例だね。いつの頃からか、盛大に咲いて散るときは潔くはかなく散る様子が当時のお侍さんと同じ様だつたらしい。そして桜は『死』そのものも意味するようになつてきた、という説もある」

そう言つと、教授は机のある枝を半ば慈しむかの『とく』しわが目立つ指でそつと撫でる。青年はその様子がどこか教授もはかないモノに見えてしようがなかつた。

「春の桜は散り果て、夏の螢は命を燈す。秋の落ち葉は色あせ、冬の雪も最後には溶けてしまつ。でも、それらはみんな心残りはあるだろうか。意味の無いものだつたんだろうか。君はどう感じるかね？」

それは教授が教えていた科学的で、論理的な事実に沿つた問い合わせ180度違つていた。普段とは違う抽象的な質問に青年はまづひくが、一度深呼吸をして静かに答える。

「……全て、意味があると思います。何より見る人を楽しませてくれるんで」

「そう、意味があるものなんだ。綺麗なもの、風流なもの。みんなそうだ。でもね、それら自身は一体どう感じているんだろうか？何より、自分の美しさを見る手段がない。それこそ、それからすれば、それら自身は矮小でみすぼらしいモノかもしれない。私達だけ

て鏡の前に立つて始めて、やっと自分自身を見ることができた。でも、それも左右逆転した完全に真実のモノではない。何より大体の物はきつかけさえあればすぐに変わってしまうんだ

教授は、静かにかつ芯の強さを持ったハキハキとした口調で続ける。紡がれた言葉のことごとくが、青年がスポンジかと思つ位に染み込んでいき、内側から響いていくようであった。

「では もしこの世の物が全部そうだとすれば、僕はどう過ぐすのが良いんでしょうか？」

教授は自分に何を伝えてくれるんだろうか。青年は、転機となり得るかもしれない言葉を期待し、輝いた目をして教授の言葉を待つた。

「ああ、決まった過ぐし方なんてモノは 無い」

だが、その過度な期待はストライクゾーンを大きく外れた物であった。微かに青年の目の焦点が、予想外の返答によって揺らぎ、白黒させた。

そんな青年の反応」ときでは教授の話が絶たれることは無かつた。半ば反応を予期していたかのように平然と話を続ける。

「と言つよりも、日常を過ごすというのは元々決まっていない、曖昧な事柄なのだよ。考え方も振り返り方も人それぞれなモノ。もう爺さんである私でさえも分かりかねる難物さ。それこそ世界が壊れやすいモノだとするならば、途中で変貌して余計に選択肢が生まれるんだ」

「じゃあ、何を頼れば良いのですか？最終的には、自分しか分からなくなるじゃないですか」

そう青年が問うと、教授は心底嬉しそうな顔をした。企みが上手くいった少年のような、邪氣の無い口角を一一杯引き上げた笑み。老人の皮を被つた純粋なる少年が今そこにいる、と青年の目には映つた。

「ふふつ、『明答。自分を信じること』が最大の拠り所なのだ。それこそ、悩み続けていても前に進んで行ける強大な力となる」

はて、悩みながら進むとはどうことだろつか。疑問は次の言葉で溶ける。

「普通は悩むとき止まつてするもの。でもね、それじゃあ今は生きていけない。進み続ける義務が私達にはあるのだ。まだ首が据わらない赤ん坊も、私のようなヨボヨボの爺さん婆さんでも、悩みを持ちつつ気持ちだけは前向きに行かなければならない」

更に重さを増して青年を取り巻く言葉の奔流。しかし、あの笑みを見た時から受け入れる準備はできていた。

「過激に言えば、『生きている間は悩み続ける。やめる時は死ぬ時だ』と、言えるね。私自身はこう自分に戒めている」

「悩む」とすなわち人生、ですか。何とも深い言葉ですね……

青年は素直に感嘆していた。憑き物の皮が玉葱を剥くように次々と教授の言葉で取りさらわれ、あとは自らが最後の一皮を一気に引きちぎるだけだ。今までと比べて何と心の軽いことか。今まで立ち

止まっていたが道が開かれかけた今は本来の加速度を取り戻し、身体が進みはじめた気がした。

「そんなに深くも無いだろう。他の人からしたらざれ言に取られかねん。というか、この話はみんながいなくなる時にしたかったんだがね。また、考えなればならんな、ハハ」

教授は顔に刻まれたしわをさらに深めて、笑顔を作る。子供っぽさと老齢さが顔には、入り混じっていた。

「ただ、進めば良いだけなのだ」

気が付くと、金色に室内を彩っていた斜陽は既に居なくなり、代わりにほぼ真円に近い十六夜が群青色のキャンバスに青白い光りを何の齟齬もなく重ねていた。

5年後。老人が部屋の中で一人、ロッキングチェアが揺れるのに身を任せ雑誌を読みふけっていた。彼が学生の頃から続けており、今は生活の一部となっているその行為を今日も例外無く行う。しかし、心の中ではどこと無く、いつもとは違ったモノになるどううと、長く生きてきた勘によつて確信していた。

リューマチが酷く強張る手に鞭打ち、ページをめぐり続ける。しばらくすると、あるページに吸い寄せられるかのように老人の目が留まった。

そこに書かれていたのは、いつかの青年の研究成果であった。教授の職を退官した後に聞いた風の便りによると、大学を出た後大学院に進み博士課程に進んだそうである。

記事の内容を老眼が進行し、しょぼしょぼとした双眼でゆるりと追う。どうやら、2つの物質の状態を取り持つまた新しい物質を見したらしい。かつての悩んでいた青年が、今ではしっかりと前を進み続けてることが堪らなく嬉しくて、安堵していた。

「そうだ、生きている間は悩み続ける」

そう言つて老人は目を閉じた。

博士となつた青年が恩師の訃報を耳にしたのは、その翌日のことであった。

(後書き)

「自分が3時間かけて作った文でさえも、読者は10分足らずで読み終えてしまうのを」

と、書いてころんときふと思った。特に意味はない。

半端・末派の作者でいらっしゃいますが、これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441m/>

夕刻のキャンパス

2010年10月15日15時40分発行